

# 10年後の県立高 住民の思いは

## あり方検討会 年内の意見交換終了

熊本県立高の将来像を議論する「県立高等学校あり方検討会」が10月から県内各地で開いている地域住民との意見交換会は、17日の上天草市で年内の予定を終えた。これまでに16カ所で開かれ、計約920人が参加した。高校の統廃合を懸念する声がかかる一方、地域と学校が共に活性化する方策や学校の魅力を高めるアイデアなど多彩な意見が上がっている。

「菊池高のポート部、菊池農高の馬術部など部活動の魅力を高めてほしい」「入学者が熊本市の私立に流れたら意味がない。公私立校の両方であり方を考えるべきだ」。11日、菊池市文化会館であった意見交換会では菊池高生や教職員、市民ら57人が活発に発言した。

終了後、菊池高2年で生徒会長の山本湧さんは「多くの人が学校のことを考えてくれてうれしい。今日のアイデアを参考に、自分たちができることを実行したい」と力を込めた。

## 魅力向上へアイデア／統廃合に厳しい指摘

「県立高あり方検討会」の松下琢会長（雲城大教授）に、地域意見交換会の狙いや住民から寄せられた意見の反映方法を聞いた。

### 検討会・松下会長

意見交換会の目的は何でしょうか。

「地域の人たちに地元の学校を支える意識を高めてもらうのが狙いの一つだ。県立高がある市町村を全て回ることが決めたのは学校と地域が協働することで、地域活性化にもつながるのではないかと考えた」

「人口が減り続ける中、設置者である熊本県だけで高校の在り方を考えるのは限界がある。できる限り地域に高校を残していくには、地域で生活する人たちの力が必要になる」

## 学校存続 地域の力必要

「班ごとに話し合う形式にしたのはなぜですか。」  
「学校存続に欠かせない生徒と保護者、教職員、地域住民の4者が一緒に考える場に適していると考えた。どんな学校になってほしいかをみんなで話し合うことで、より良いアイデアが出てくることを期待した。母校や地元を愛する住民の熱量が、想像以上にひしひしと伝わってきた」  
「地域から出た意見はどのように反映しますか。」  
「検討会の提言に盛り込むグラウンドデザイン（基本



「人口減少の社会で高校を存続するには地域の力が必要になる」と話す松下琢会長＝12日、熊本市西区

意見交換会では、県教育委員会が中学卒業予定者数の予測や県立高の定員充足率の推移、検討会で示された募集定員の見直しと分枝化・統廃合の基準についての方向性も説明する。これらの現状を踏まえ、参加者は4人1組で話し合った。

「7月には10年後、地域にあつてほしい高校の姿」。参加者は肩書を問わず自由に発言し、他人の意見を受け止めることがルールだ。席を替えながら、10分間の話し合いを3回繰り返す。出た意見は縦80センチ、横200センチの模造紙に書き込まれ、学校への地域の「思い」が可視化される。

各市町村の会場では、その地域ならではの意見が目立った。高森町では草原の利活用を学ぶ「草原学科」の新設、小国町では「小国杉について詳しく学べるようにしてほしい」といった要望が寄せられた。

定員のあり方を考えさせられる保護者の声もあった。定員割れしている甲佐高は1学級の人数が少なく、中学時代に不登校を経験した生徒が生き生きと登校していることが話題になった。卒業生の甲斐聖子さん(45)は「少人数だからこそ、息子はずっとやりたかった生徒会活動を頑張っている。10年後も小さな困り感を救ってもらえる学校

美咲」

「過疎地域だから学級を減らすということでは納得できない」「熊本市内の高校の学級数も減らすという、以前の再編時の約束が守られていない」。123人と最も多くの住民らが参加した山都町では、厳しい指摘もあった。

検討会の田中尚人副会長（熊本大准教授）は「さまざまな意見を出していただくのはありがたい。小中学生の保護者や地元の産業界の方たちも積極的に参加してほしい」と期待する。